

母の 631 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

詩／やなぎの木のゆめ 小野寺悦子 2
ひろがる！ひろがる！紙しばい③ キム・ファン 3
人を育む 生きた言葉、物語 佐々木由美子 4-5
新刊紹介／佐々木宏子、いとうみく 6
〈紙しばい 秋祭り〉に参加して - 演じられてこそ紙芝居 -
こがようこ 7



イラスト／田島征三

いま憲法について考えること

堀尾輝久

憲法が危ない！ 世界が危ない！

安倍首相は「戦後レジームからの脱却」を掲げ、憲法の枠内でも言いつつ集団的自衛権を容認し、昨年9月には安保法制を強行採決しました。憲法との矛盾がますます大きくなる中で、憲法審査会を開いて、条文改正へと動き出そうとしています。そんな動きに対して、とりわけ昨年は、ママの会やSEALDsの若者たち、そして学者たちも批判の声を挙げ、学習を深めてきました。今大切なのは改憲論への丁寧な批判に加えて、現憲法の意義を歴史の中で、そして生活の中で捉えることです。

自民党の改憲案は単なる改憲ではなく、憲法の原理を根本から変えようとしています。前文の主語は「日本国民は」から「日本国は」に変わり、この「憲法を制定する」とあります。さらに97条の、「基本的人権」を銘記した「最高法規の規定」は、全文削除されています。憲法が、人権を保障するために国家権力を制約するものではなく、逆にわたしたちの人権を制約するものになっているのです。

改憲論のもう1つの主張は9条改正です。「戦争放棄」は「安全保障」という名目で削除され、そのための国防軍が規定されます。安倍首相は「積極的平和主義」を主張していますが、その内実が「平和のために戦争に備える」ための改憲であることは明白です。9条については、「占領軍が日本を丸裸にするために押しつけた恥ずかしい規定」だとする根強い主張があり、首相もそのような認識を公言しています。しかしこの度、私が国会図書館で見つけた高柳賢三（憲法調査会会長）とマッカーサーの往復書簡（1958年12月）によると、マッカーサーは「あれ（9条）は、幣原首相の先見の明とステイツマンシップ（政治家としての心構え）と叡知の、不朽の記念塔だ」と明言しています。これは、憲法9条が決してアメリカに押しつけられたものではないことを表してはいないでしょうか。

憲法の前文にはこう書かれています。「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。（中略）日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ」。

憲法9条を、戦争で犠牲を与えたアジアの人びとへの国際公約として心に刻み、憲法前文と結びつけて「地球時代」にふさわしい思想とすること。外交政策の軸に据えて国際的にアピールすること。何より足下の日常生活の中に平和の文化を根づかせること。そうして、私たちは、世界の平和に貢献するための具体的な方策と手だてを作りだしていかなければならないのです。9条を持つ地球憲章を！ 非戦・非武装の精神を世界に！ それが私の夢です。（ほりお てるひさ／教育学者）

小川のそばの

やなぎの木が

ゆめをみるなら

そりゃ きっと

ライオンになったゆめだよ

たてがみふさふさ

かぜになびかせ

みず みず

みずがのみたいよおって

なきながら はしっている

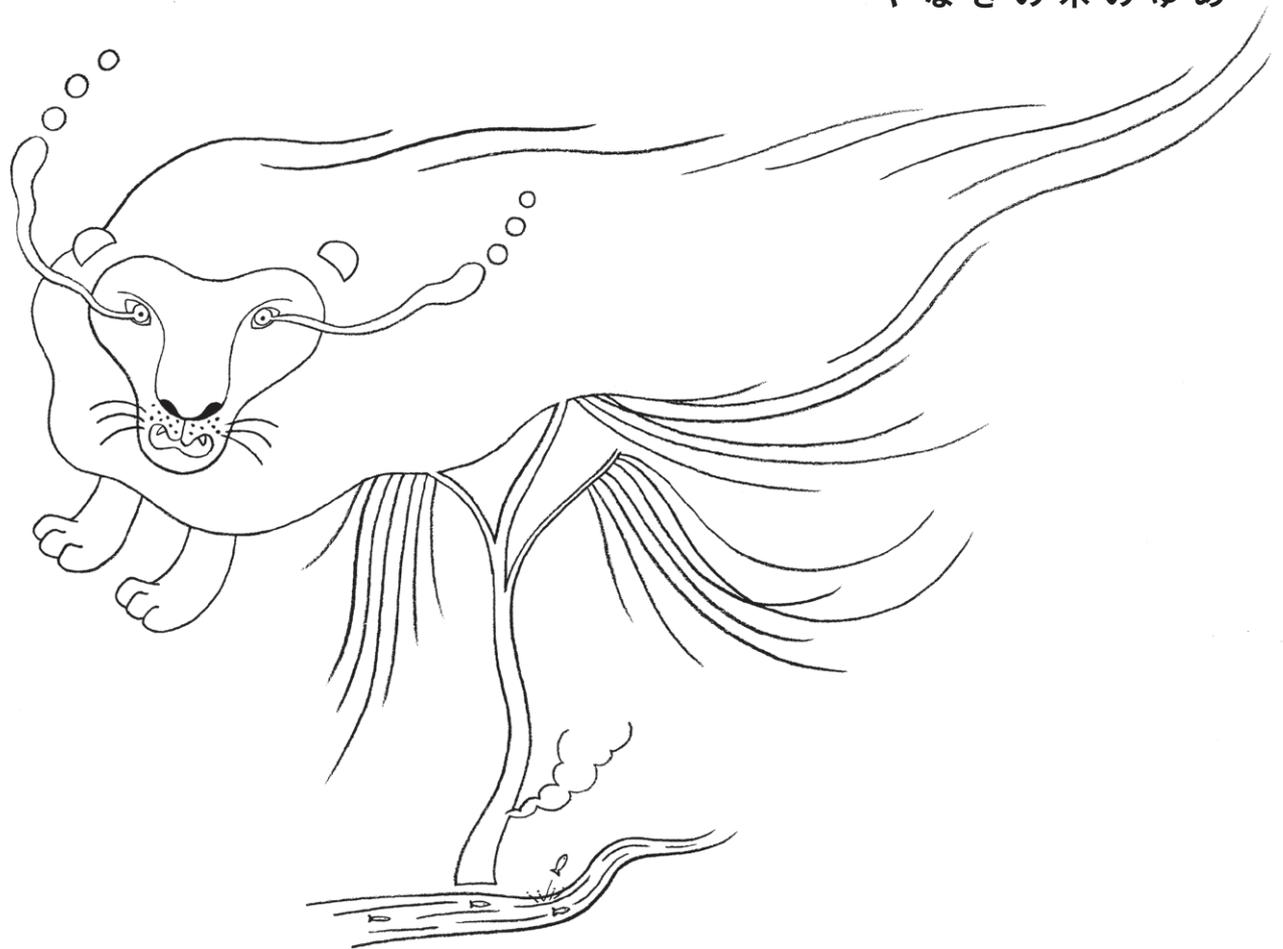
ライオン

目をさましたら

きっと いうよ

あーやなぎの木でよかったなあって

やなぎの木のゆめ



小野寺悦子

おのでら えつこ／詩人、童話作家。
詩集に『これこれおひさま』(のら書店)、
絵本に『つららがぼーっとん』『あーとってよあー』(いずれも福音館書店)
紙芝居に『おっはよう もうおきた?』(童心社)など作品多数。
岩手県盛岡市在住。

ひろがる!
ひろがる!
紙しばい

13

キム・ファン

児童文学・紙芝居作家。主に動物をテーマとしたノンフィクション作品を執筆。作品に『サクラー日本から韓国に渡ったゾウたちの物語ー』(学習研究社)『きせきの海をうめたてないで!』(童心社)など。韓国での著作も多数。

ぼくが韓国ではじめて紙芝居を演じたのは二〇一二年のこと。図書館側との打ち合わせで、自作の紙芝居を上演したいとお願いしたところ、「何ですか、それ?」と質問がきた。今でこそ紙芝居は「クリム(絵) ヨングク(演劇)」と呼ばれているが、そのときはまた、紙芝居を指す韓国語すらないも同然という状況だった。

さて上演すると、子どもたちははじめて見る紙芝居に興味津々。いやむしろ、後ろで見て大人たちの方が物語にどっぷりと入りこんだ。主人公がピンチになると「チチチ」と舌打ちするし、ピンチを脱すると「おつ」と安堵する。韓国は感情表現が豊かなお国柄、紙芝居は必ずや受け入れられると確信した。そこで初上演以来、荷物が許すかぎり、重くても旅行かばんに紙芝居舞台を詰めこんで講演へとでかけていっている。

二〇一五年三月、ソウル市の「道峰洞子ども図書館」での講演のことだった。控室に入ってから舞台を取りだすと、「つわつ、紙芝居舞台だ!」とマ・ヨンシヨンの館長が嬉しそうに声をあげた。紙芝居のことを知ってくれていて、こちらも嬉しかった。すると、講演が終わるや否や、読み聞かせボランティアの方たちがぼくを取りかこんだ。彼女たちがぼくに見せにきたのは、手作りの紙芝居と手作りの紙芝居舞台。聞くと、マ館長が

図書館の人が
韓国に伝えた
紙芝居

子どもだけでなく、大人も紙芝居に興味津々。

日本の図書館との交流会で紙芝居の存在を知り、それをボランティアの人たちに話したところ、自分たちもやりたいと手作りしたとのこと。この日の食事は、にわか「キム講師による紙芝居講座」となったのだった。

そして今年一〇月、京畿道龍仁市の「ヌティナム図書館」にいくと、何と、童心社の紙芝居と舞台があるではないか。パク・ヨンスク館長に理由を聞いた。

「二〇〇九年に韓国の図書館関係者が、日本の〈親子読書地域文庫全国連絡会〉から招待を受けて東京を訪問したときに、レセプションの席で、わたしたちは紙芝居をはじめて見ました。二〇一三年には日本の〈むすびめの会〉(図書館と在住外国人をむすぶ会)の方たちがヌティナム図書館を訪ねていらしたのですが、一緒に訪れた図書館関係者の方が、これをプレゼントしてくださったのです」

このように日韓の図書館交流で韓国に紙芝居が紹介され、さらに韓国人と結婚した現地の日本人が図書館での多文化プログラムで紙芝居を演じるなど、紙芝居が徐々に広がりはじめています。パク館長はつぎのようにつけ加えた。

「今はまだ、日本の方がときどき上演するくらいですが、韓国語版があれば、もっと頻繁に上演されることでしょう」韓国語版発売が、待ち望まれている!

人を育む

佐々木由美子

ささき ゆみこ / 幼稚園教諭を経て、現在は東京未来大学教授。絵本や紙芝居を中心に、子どもの育ちと文化について研究している。

生きた言葉、物語

言葉の弱体化

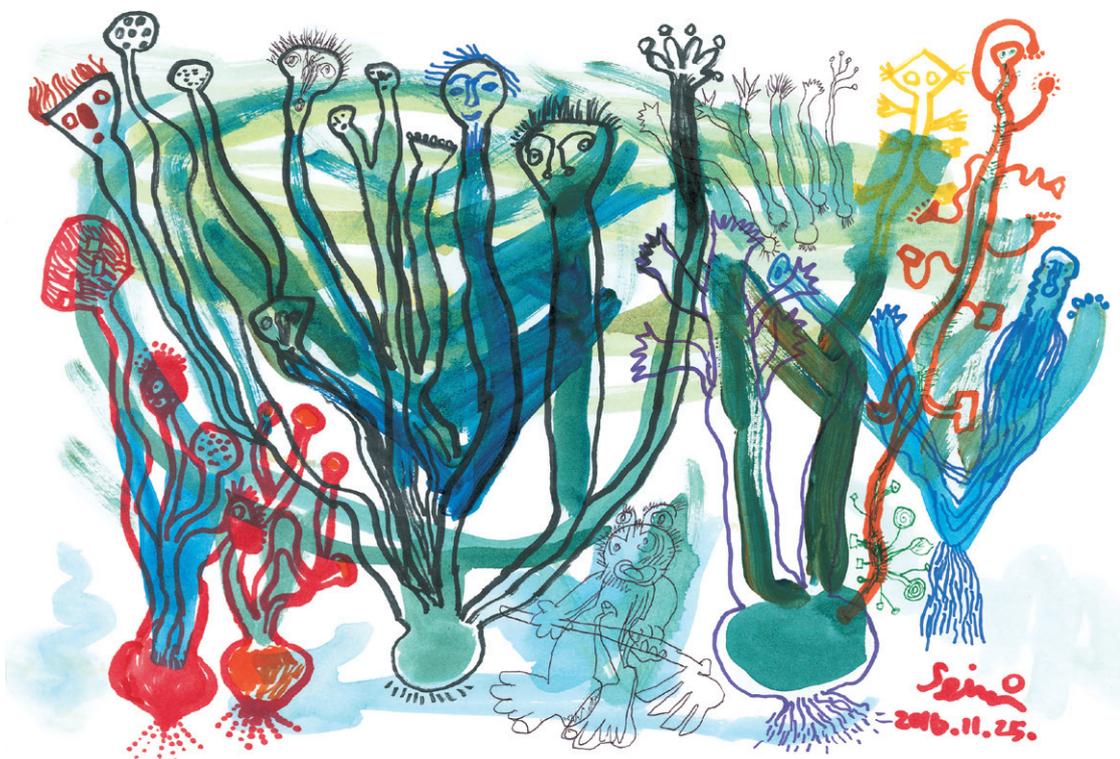
●「こんにやくの おうどん」

最初に、子どもたちの言葉をすこし紹介しましょう。二歳の女の子が白滝を食べながらいました。「おかあさん、こいうのが、こんにやくの おうどんでしょ〜」

「こんにやくのおうどんとは、言い得て妙です。子どもは、初めて出会ったものに対して、これまでの経験や知識を総動員して理解しようとしています。子どもの造語は知恵の結晶です。」

次は、四歳の男の子がフランスパンを食べながらいった言葉です。「マーガリンがないので、よっばらっちゃんた」

「この子は「酔っ払っ」といふ言葉を、「疲れる」という意味で使っているようです。いったいどんな場面か、この言葉を覚えたのでしょ〜。この子にとって、「酔っ払っ」といふ言葉との出会いが印



象的だったにちがいありません。子どもは私たち大人が考える以上に、心を動かし、五感を働かせて言葉を吸収しています。

●何でも「すごい」

ところが、最近、身の周りで耳にする言葉がずいぶん貧弱になっているように感じます。生き生きとした実体験を伴わない、表面的で空虚な言葉が増えているように思います。

保育者を志す学生たちも、何に対しても「すごい」を連発します。子どもの驚きや発見に対して「すごいね〜」だけでなく、何がどうすごいのか、子どもの思いに寄り添った言葉がもっとあるでしょうに、なかなか出てきません。

子どもたちの使う言葉が乱暴になっているのにも気がかります。三、四歳児が「死ね」「殺すぞ」「むかつく」といった言葉を簡単に口にします。子どもは、聞いたことのない言葉は使えません。乱暴な言葉が子ども身の身近にあり、ときに子ども自身にも向けられているのだと思うと、その子の心のありようが心配になります。

また、遊びの中で友だちと意見があわなかつただけで、「もう遊ばない」「絶対」と、相手との関係性を断ちきるよう

な言葉を簡単に使います。言葉のやりとりが少なへ、「なぜ?」「どうして?」と相手の心に近づいて思いを聴くことも、自分の思いを伝えることもなく、ひと言ですべてを終わらせてしまうのです。

言葉は、コミュニケーションの道具であるだけでなく、思考の道具です。私たちは、ものを考えたり、ものを認識したりするときも言葉を使っています。うれしいとか、悲しいといった人間らしい感情を育んでいく上でも欠かすことができないのが言葉です。異なる価値観を伝えあい、違いを認め、調整しあうのも言葉の力です。言葉が荒み、貧しい言葉しか生まれてこないのは、言葉だけの問題ではなく心の問題です。言葉の危機は、心の危機なのです。

声としての言葉

言葉は、声の文化と文字の文化に大別することができますが、ここでは声としての言葉について述べたいと思います。万葉集にも歌われているように、日本には古くから言霊信仰がありました。言葉には霊力がやどり、声に出した言葉が現実の事象に何らかの影響を与える、ととらえられてきたのです。

声としての言葉は、単に情報を伝える

だけでなく、発する人の声や息づかい、表情、しぐさ、ぬくもりを伴っています。つまり、声としての言葉は体温をもつ生きた言葉です。生きた言葉こそが、人を人として成長させていきます。

●言葉によるスキンシップ

赤ちゃんは、受胎後四か月を過ぎる頃から聴力が発達し、母親の声を聞いています。羊水に囲まれているので、一音一音の明瞭さは失われますが、音声の上がり下がりや強弱の変化パターンによって、メロディーとして母親のメッセージを受け取っています。考えてみると、私たちが乳児に語りかける言葉は、音楽的です。「ほくら、いい気持ちになったでしょう。いい気持ち。いい気持ちね」と、声のトーンがやや高めになり、抑揚が大きくテンポがゆったりで、繰り返えしが多くなります。私たちは無意識のうちに、赤ちゃんにとって一番心地よい音楽的な言葉で語りかけているのです。

瀬田貞二氏は「子どもがまた物心つかないうちから歌うわらべうた、子守歌のよつなものが、一番大切で、児童文学の第一歩、その基本じゃないか」と述べています。赤ちゃんへの語りかけや、子守歌、わらべうたは、言葉によるスキンシップにはかなりません。体温をもった生

きた言葉は、発する人の想いも着実に届きます。愛情のこもった言葉をたくさんかけてもらうことによって、言葉はもちろん、知能や情緒も発達していきます。もし、周りの大人が赤ちゃんの泣き声に応えたり、語りかけたりしなかったら、赤ちゃんは人と関係を結びたいという欲求を失ってしまいます。表情もなく、知能の発達も遅れてしまいます。

乳幼児期は言葉がうまれるときです。心があふれて言葉になります。自分が大切にされ愛されている実感、人に対する信頼が、育ちの土台になっていきます。

声の文化の縮小と絵本・紙芝居

現代は声の文化がどんどん縮小しています。子守歌やわらべうたを知らない人も増えました。かつての囲炉裏端のように昔話や物語に耳を傾ける場もなくなりました。昔話には、長い間に口伝えされてきた知恵や勇氣、物事の真実が凝縮されているのに、残念なことです。

乳児にスマホを手渡しして、スマホに守をさせる光景も珍しくありません。絵本でさえ、字が読めるよつになると、自分で読みなさいといってお母さんは多くいます。自分で読むよりも読んでもらいた方が絵本の世界をまるごと楽しむこと

ができます。読んでもらうということは、読み手である親なり先生なりの身体を通った、生きた言葉に満たされることです。あたたかい思いのこもった言葉は、物語と共に心に届きます。文字をもたない幼い子どもは、声の文化のなかに生きています。だからこそ、全身で言葉を受けとめ、物語の世界に入り、自分の中に取りこんでいくのです。

●演じ手も観客も一緒に

声の文化が縮小していくなかで、絵本や紙芝居はとても大切なメディアです。子どもは生後一〇か月頃になると、指さしをするようになりますが、大好きな人と同じものをいっしょに見て心を通わせあう「共同注視」は、愛の体験ともいえます。紙芝居は、基本的には集団を意識し、誰かに読んでもらうことを前提にくられています。小さな紙芝居のなかに、人と人との関係性が含まれているのです。大好きな人に演じてもらい、友だちといっしょに受容し、演じ手も観客も一体となる紙芝居。そこにはかつての語り場と同じ、親密な時間と空間が生まれます。保育のなかでは隙間の時間に読まれることが多い紙芝居ですが、ぜひ子どもたちといっしょに楽しんでほしいものです。

BOOK

いっしょに遊ぶ
赤ちゃん絵本

佐々木
宏子



「まんまん ぱっ！」
長野麻子／さく
長野ヒデ子／え
本体価格880円＋税

新しい赤ちゃん絵本が出版される。その絵本をもって、大学の児童図書室へ出かける。私は、幼い子どもを対象にした絵本の価値は、読み合いの中でこそ決まると考えている。「今日はどんな赤ちゃんが来ているのかな？」と、素早く視線をめぐらす。先週、パンを描いた絵本で読み合いをして大笑いをしてくれた2歳3か月のYちゃん（男児）がいる。0歳児は来ていないようだ。よし、今日は、彼のコメントを聞いてみよう。

「まんまん ぱっ！」で、中央の顔を注視。「ばいばいばいばい」で、私が指でリズムカルに押さえた動きを素早く模倣して、Yちゃんも共演する。「ぐるぐるぐる～ん」も同じように左手の人差し指で、3つのカラフルな糸が渦巻く動きをなぞり、大きな声で私のゼスチャーを追いかける。以下の見開きも同じように笑顔、ゼスチャー、オノマトペの競演。さあ、クライマックス。「ぱくぱくぱく」とあらゆるものを食べた「まんまん」は、どうなるのか。それは「あわわわ わっ！」と大きな口をあぐり開けて正面の読者を見ていた。私は、少し大きな声で「わっ！」と言っただけだが、Yちゃんは自分の口を最大限広げて「わっ！」というゼスチャーをしてみせてくれた。これは彼のオリジナルな表現だ。今度は、私がその驚きに協演する番だ。最後の見開きを閉じると、彼は「もっかい」と言った。

(ささき ひろこ／鳴門教育大学名誉教授)

小学生の世界は広いとはいえない。多くの子どもの場合、その世界は家庭と学校が大半を占めている。だからこそ、その世界で困難や問題に直面すると苦しい。逃げたいと思っても、子どもには逃げる場所がないのだ。

この物語は、子どもたち数名が校舎内で忽然と姿を消してしまうところから始まる。学校では大人たちが懸命に探すが、手掛かりはない。まるで神隠しだ。一方、消えた子どもたちも混乱していた。自分たちが立っているのは見慣れた学校のはずなのに、なにかが違う。数分前までの教室でも授業をしていたのに、だれもいない。

「子どもたちは、いったいどこへ？」「ここはどこ？」

消えた子どもたちに共通しているのは“どこかへ行ってしまう”という気持ちだった。子どもたちを探す大人たちと、消えた子どもたちとの両方の視点から謎解きが始まる。本作はミステリーとしても、ファンタジーとしても読めるが、作品を貫いているのは、現代の子どもたちが抱える問題だ。子どもたちは元の世界へ帰ることができるのか。そして帰ることを選ぶのか。大人たちは子どもたちを取り戻すことができるのだろうか。

子どもの力を信じる作者渾身の物語に、最後までページをめくる手が止まらなかった！

(児童文学作家)



「神隠しの教室」
山本悦子／作
丸山ゆき／絵
本体価格1600円＋税

もうひとつの学校の扉がひらくとき
いっしょにみる

BOOK

〈紙しばい 秋祭り〉に参加して —演じられてこそ紙芝居—

こが ようこ

語り手・絵本、紙芝居作家



第1部の主役は、子どもたちでした。



大人たちは作品を観て意見を交わします。

童心社のKAMISHIBAI HALLで開催された〈紙しばい 秋祭り〉に出席しました。紙芝居の作家、画家たちが共に作品を見て、批評や意見交換をする会です。1995年から始まり、今回は3年ぶりの開催とのこと。わたしは初めての参加です。今回は保育園の子どもたちも紙芝居を見にくると聞き、ワクワクとでかけました。

第1部は保育園の年中・年長の子どもたちと『おおきく おおきく おおきくなあれ』（脚本・絵／まつのりこ）『おうさまぶちゃん』（脚本・絵／馬場のぼる）『ロボット・カミイ ちびぞうのまき』（脚本 古田足日／絵 田畑精一）を楽しみました。子どもたちは歓声をあげ、元気に笑う。子どもたちと見ると作品のおもしろさがよくわかります。反応することは、心が動く瞬間……心に触れるなにかを感じるには、一緒に楽しむことがとても大切なんですね。

第2部は大人だけで作品を見ました。長野ヒデ子さんが、ご自身の作品『ころころ じゃっぼーん』を演じてのスタートです。あかちゃん紙芝居は、心地よいリズムのくり返しが大切。ゆったりとして温かみのある声がとても心地よかったです。わたしも、紙芝居を作るときは何度も声に出します。自分の中にあるリズムが、子どもたちに心地よいか、演技手に伝わるのか。それでも実際に演じてみないとわからないことがたくさんあります。長野さんは楽しそうに演じてらっしゃいました。作品づくりに、作品を受け手に届けるためにも、演じることは大切です。

続いては、今年の五山賞の『カヤネズミのおかあさん』（脚本 キム・ファン／絵 福田岩緒）。小指ほどという小さなカヤネズミに、皆さん興味津々でした。『おうさまのひげ』（脚本 横笛太郎／絵 織茂恭子）では、絵を描かれた織茂恭子さんから作画の裏話が伺えました。王さまについて、内面からも外見からも、王さまらしさとはなんだろうと突きつめて考えたといひ、勉強になりました。固定観念に縛られがちですが、自分で枠を作っているのだと反省……。最後に、大型紙芝居で迫力ある『あひるのおうさま』（脚本 堀尾青史／絵 田島征三）を堪能。

交流会でもたくさんの意見が交わされました。「海外、とくにアジアで広まることで、みんな仲良くなれたらうれしい」という和歌山静子さんのことが印象的でした。とてもシンプルで、力強いメッセージです。

自分の紙芝居を演じたり、見る機会が今までなかったという方もいらしたのは意外でした。その場に身をおいてみないとわからないことがたくさんあると思います。ドキドキですが、発見もいっぱいです。

わたしは語り手としても活動しています。今回改めて「声」についても考えました。声には人となりとか、歩いてきた人生のようなものが見えかくれます。その声の持つ温かみも含めて観客は紙芝居を楽しむのでしょうか。演じられてこそ生きる紙芝居。生の声の温かみを伝える文化が紙芝居にはあると感じました。声を出して作る。演じる。そして楽しむ。声で伝えていく作家でありたいと、改めて感じた一日でした。ありがとうございました。

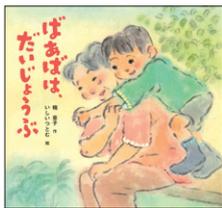
12月の新刊図書と紙芝居!

絵本・ちいさななかまたち

ばあばは、 だいじょうぶ

楠 章子 / 作
いしいつとむ / 絵

本体価格1300円+税



大好きなばあばが「わすれてしまう病気」になって、変わってしまった。そして冬の寒い日、ばあばがいなくなり……感動に包まれる絵本。

松谷みよ子 モモちゃんのおはなし

本体価格 各1900円+税 / セット価格 5700円+税
全3巻

モモちゃん「あかちゃんのうち」へ

松谷みよ子 / 原作
相星真由美 / 脚本
土田義晴 / 絵

12場面

はじめて「あかちゃんのうち」へ行くことになった1さいのモモちゃん。プーは、おうちでおるすばんです。でも、でんわがかかってきて……。



モモちゃんちに来たぞうさん

松谷みよ子 / 脚本
土田義晴 / 絵

12場面

ぞうさんが、モモちゃんのたいせつなおにんぎょうをもっていってしまいました! 「ぼくのなまえをあてたら、かえしてあげる」ですって…?



あかちゃんとおるすばん

松谷みよ子 / 原作
水谷章三 / 脚本
土田義晴 / 絵

12場面

ママがおでかけするので、モモちゃんは、あかちゃんとおるすばんすることになりました。さいしょはすやすやとねむっていたあかちゃんだけど……。



読者の声

日・中・韓 平和絵本
とうきび
クオン・ジョンセン / 詩
キム・ファンヨン / 絵
おおたけきよみ / 訳
本体価格2200円+税



私の実家は秋田県能代市の郊外にある農村です。「とうきび」の舞台の情景が、母の育てているとうもろこし畑に似て切なかったです。平和を祈ります。
(秋田県 Y・T 四八歳)

かんぱい! シリーズ
なきむしに かんぱい!
宮川ひろ / 作
小泉るみ子 / 絵
本体価格1100円+税



シリーズ一〇冊目の刊行おめでとうございます。咲ちゃんが泣くたび成長してお姉ちゃんになっていく様子が、自分の幼い頃を思い出しました。まわりの大人が温かく包みこんでくれるから、咲ちゃんは成長していったのですね。絵もすばらしく、大好きな本になりました。
(東京都 H・S 六六歳)

あとがき

●「こんにやくのおうどん」何とも美しい言葉です。幼い子の感性には及ぶべくもありませんが、女子高生流行語大賞2016を見て、「はげる」というワードには感心しました。毛が抜けてしまうほど嬉しい、というような意味で「凄さ」を表す最上級の表現だそうです。長持ちしない言葉だとしても、自分の表現で思いを伝えたいという心は大切ですよ。◎

●子育て中の友人たちは皆「自立してしっかりと生き抜ける人になって欲しい」と口を揃えますが、では「生きる力」とは何か? という問いへの答えはさまざま。語学力、異文化適応力、パソコンスキル……。わたしの意見はかなり少数派。火が熾せる、魚や獣が獲れる、食べられる野草が分かる……今の時代こそ、生物としての本能を高めて欲しいのです。◎

2016年12月15日発行(毎月刊)
母のひろば 第631号
定価50円(年600円/送料とも)
発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話03(5976)4402
編集発行人: 大熊悟
童心社のホームページ:
http://www.doshinsha.co.jp/
フォーマットデザイン: bise inc.

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。

